世界の柔道選手にみる礼－比較文化論の観点から

中　村　　勇

Ⅰ．はじめに

日本で誕生し時代の変遷の中で受け継がれてきた武道は，いうまでもなく日本固有の伝統的価値観に密着している。明治以降，この独特の価値観に惹かれた外国人修行生を中心に国際普及が本格化した柔道だが，オリンピック種目採用をきっかけに次第に伝統性より競技性が重視されるようになり，世界各国への普及が加速化する一方で「柔道がJUDOになり，武道性が失われた」とまで批判されるようになった。

国際柔道連盟（ＩＪＦ）ではオリンピック競技としての存続が柔道の普及を促すという考えのもと，競技に関わる様々な改革を行ってきた。特にパク会長時代（1995 － 2007）にはこの競技化の流れを加速化した一方で，武道において重要な位置づけにある礼の本質に関わる問題も発生した。しかし礼の精神は国際スポーツ社会の中でも柔道の独自性を特徴づけるものであり，競技全盛の現在においてもその重要性は失われていない。

発表では国際柔道界における礼に関する議論を元に，多種多様な文化の中での礼の普遍的価値を探るとともに，武道の国際普及に伴う価値観の相違による障害克服へ向けた話題提供としたい。

Ⅱ．本論

パク会長時代に入ってすぐ米国において礼に関する訴訟が発生した。これは米国人少女と弟が，試合時に義務づけられている礼を拒否し失格となったことが信仰の自由に反する公民権法違反だとして米国連盟とＩＪＦを訴えたものである。彼女らは，特に公共施設で創始者の写真や試合場など物や場所へ礼を義務づける行為は，日本の神道思想を強要していると主張した。6年以上の法廷闘争を経て，米国地裁は柔道の礼に宗教性はなく文化的儀式にすぎないと認め，原告敗訴となった。

この事件はＩＪＦにとっても礼のあり方について議論し，整備を行うきっかけとなった。

それまで義務化されていた「正面への礼」や「試合場への礼」などを廃止，または強制しない方向へのルール改定が段階的に行われた。その理由として，⑴一試合中で礼が多すぎ選手が混乱する，⑵「正面への礼」など目的が不明瞭である，⑶試合場外での行為（礼）は審判員が監視しにくい現実的問題がある，⑷礼は本来強制的なものではなく自発的なものである，⑸数を増やすより必要不可欠な「相互礼」に限定して徹底させる方がよい，が挙げられた。特に「正面礼」は受容可能な普遍的意味付けができず，礼の重視をうたって導入してからわずか2年足らずで廃止となった。

Ⅲ．結論

柔道においては競技レベルの向上や普及の拡大化の中で世界的にも礼をさらに重要視する流れにあり，かつてはトラブルがあったイスラム教諸国との問題もほぼ解消したと考えられている。

しかし，本来の日本武道の礼には神聖な空間への畏敬の目的があり，また，礼の形式そのものが宗教を連想させるなど，異文化に向けた普及指導活動においては細心の注意をはらう必要があろう。またこれは礼に限らず武道に内在する日本伝統の慣習すべてにおいて共通する点かもしれない。

さらにこの価値観の相違に起因する問題は何も柔道や国際局面に限定されるものではなく，価値観の多様化が特徴的な現代日本において義務教育での武道必修化を迎えるにあたって武道界全体で議論しておくべきことかもしれない。